「兄になった日」

西山季輝　（30 代）

妹が生まれた日のことを、私は覚えていない。二歳差なのだから当然だ。記憶をどこまで遡っても、隣にはすでに妹がいる。兄であることは、自分で選んだ覚えのないまま、気づいたときには始まっていた役割だった。

覚えていないくせに、幼い頃の自分が妹に嫉妬していたことは知っている。親の手も、目線も、それまで一人占めしていたものを、ある日から分け合うことになった。幼い子どもにとってそれは理屈ではなく、ただの喪失だ。「お兄ちゃんなんだから」という言葉が、当時の私には不当な判決のように聞こえていた。兄という肩書きは、我慢の言い換えでしかなかった。

それが変わった日のことは、覚えている。

子どもの頃、両親の帰りが遅い日があった。家には私と妹の二人きり。夜になってもまだ戻らず、妹が「おなかすいた」と言った。私だって空腹だった。けれどそのとき妹が見ていたのは、冷蔵庫ではなく私の顔だった。仕方なく台所に立ち、あるもので簡単な食事を作った。大した料理ではない。それでも妹は、うれしそうに食べた。誰かのために台所に立ったのは、あれが初めてだったと思う。

頼られてみて、初めて分かったことがある。妹は私から親を奪った相手ではなく、私を「兄」にした相手だった。肩書きだけだった役割に中身を入れたのは、親の言葉ではなく、空腹の妹がまっすぐこちらを見た、あの目のほうだった。

家族は生まれた瞬間に完成するものだと、昔は思っていた。今は少し違う。血がつながっていても、家族には「なっていく」過程がある。私が兄になったのは、妹が生まれた日ではない。親のいない台所で、妹のためにご飯を作った、あの日だ。